



正宗白鳥全集

第二十四卷

評論 六

福武書店



正宗白鳥全集第二十四卷

一九八六年七月二十一日 印刷

一九八六年七月三十一日 發行

著 者 正 宗 白 鳥

發行者 福武總一郎

發行所 株式會社 福武書店

東京都千代田區九段南二丁目二八

丁〇三 電話 (〇三) 三三〇一三三

振替口座 (東京) 六二〇五七

印刷・製本 大日本印刷株式會社

定價 七二〇〇圓

第二十九回配本 (全三十卷)

(落丁・亂丁本はお取り換え致します)

正宗白鳥全集

第二十四卷

裝		編		監
丁		集		修
山	中	紅	山	井
高	島	野	本	村
	河	敏	健	光
登	太	郎	吉	夫
	郎			二

第二十四卷 評論六 目次

觀劇餘錄	二七	美術院の一瞥	三
歌舞伎座聞書	二九	東京座評	三
烏合會瞥見記	三〇	明治座瞥見記	三四
トモエ會所感	三二	歌舞伎座所感	三五
哀れなる藝術界	三三	藝苑雜錄	三七
漫言	三三	東京座所感	三九
片々錄	三三	春季繪畫展覽會概評	四〇
文士劇を起すべし	三六	市村座の戰爭芝居	四三
今日の音樂と繪畫	三七	歌舞伎座評	四三
明治音樂會所感	三九	二葉會と天真社	四四
放言	三九	東京座劇評	四六
片々錄	三九	研精會展覽會所感	四七
美術界小言	三	本郷座評判記	四九

歌舞伎座所感	五〇	懸賞史劇	六四
日本畫會と太平洋畫會を見て	五二	歌舞伎座の俄	六三
新富座劇評	五三	國華座の安田作兵衛	六六
明治座の『敵國降伏』	五五	本郷座のダンテ	六七
歌舞伎座評判記	五五	東京座の不如歸	七〇
東京座劇評	五七	市川蕤升に與ふる書	七二
繪畫小論	五八	白馬會瞥見記	七三
宮戸座所感	五九	美術協會展覽會概評	七四
音樂學校卒業式所感	六〇	明治座の蕤升劇	七五
歌舞伎座評	六一	劇評について	七六
眞砂座評	六三	歌舞伎座評	七七
東京座評	六五	宮戸座評	七八
宮戸座評	六五	本郷座の『想夫憐』	八〇

東京座評	八	明治座の『王冠』	七
二葉會展覽會概評	三	今年の繪畫展覽會	六
眞砂座評	四	歌舞伎座評	九
明治音樂會所感	五	眞砂座の『志士關武彦』	一〇
歌舞伎座評	六	三月の美術展覽會	一〇
音樂演奏會	六	本郷座の『新生涯』	一三
三十七年の美術界	九	東京座の魔風戀風	一三
本郷座の『乳兄弟』	七	落語研究會所感	一六
東京座『乳兄弟』	七	歌舞伎座評	一七
眞砂座評	三	四月の繪畫展覽會	一九
新演劇及舊演劇	三	明治座評	二三
歌舞伎座評	四	眞砂座評	二三
眞砂座評	六	東京座の牧の方隨感錄	二三

本郷座の不如歸	二五	白馬會展覽會	二〇
歌舞伎座評	二六	本郷座の『少華族』	二三
眞砂座の金色夜叉	二八	美術界の昨今	二三
東京座評	二九	大同繪畫會について	二五
本郷座評	三〇	音樂學校演奏會評	二七
市村座の忠臣藏	三三	東京座の『己が罪』	二八
小説劇と素人芝居	三三	美術界雜感	四〇
音樂學校卒業式に臨んで	三五	歌舞伎座評	四三
戀愛劇の禁止	三五	本郷座の己が罪	四三
東京座評	三六	劇界の趨勢	四四
本郷座の『金色夜叉』	三七	東京座の忠臣藏	四七
本郷座の『女夫波』	三八	市村座評	四九
歌舞伎座の古物劇	三八	美術界雜感	五一

大觀春草の畫論について	一三	美術界のくさく	一三
大同繪畫會について	一五	異畫會展覽會	一五
本郷座評	一五	美術界雜感	一五
眞砂座評	一五	太平洋畫會展覽會	一六
劇界雜記	一六	烏合會と眞美會	一六
明治座評	一五	歌舞伎座評	一七
歌舞伎座評	一六	平凡なる劇壇	一六
明治座の『モンナワシナ』	一三	今春の美術界	一三
文藝協會發會式	一三	五二會の繪畫	一八
『モンナワシナ』所感	一四	美術界雜觀	一八
美術界雜感	一六	昨今の美術界	一六
美術院展覽會	一六	美術界雜感	一三
二葉會展覽會	一七	博覽會美術館四畫合評	一四

皐月會	一五	觀劇雜感	二〇
美術界雜感	一六	『故郷』の印象	二三
美術界雜感	一七	思ひ出づるまゝに	二三
美術界雜感	一九	霞寶會演能所感	二四
美術界雜感	二〇	柴田環と松井須磨子	二六
劇界漫言	二二	何だか空々しい	二七
白馬會展覽會評	二三	落語研究會	二七
美術協會の繪	二三	忙中雜記	二九
歌舞伎座評	二四	帝劇合評	三〇
玉成會展覽會	二五	鴈と延	三一
演劇雜感	二七	演劇雜話	三三
多少快心の事	二八	帝劇批評	三五
四十四年の芝居	二八	市村座の四谷怪談	三八

三遊亭圓右	三三	他人の目と自分の目と	三三
演藝所感	三四	映畫について	三三
芝居の思ひ出	三五	雜感	三四
脚本について	三四〇	新劇協會所演觀	三五
思ひ出	三四一	遊藝鑑賞	三六
築地小劇場を見る	三四四	今年見た芝居	三六
六月の本郷座	三四五	演藝時評	三七
演劇に就て	三四六	『柿の種』と檢閲	三八
脚本について	三四九	觀劇餘錄	三八
感想斷片	三五三	活動寫眞を見て	三七
觀劇三日	三五四	芝居と能樂	三五
演劇雜記	三五五	芝居その他	三五
ユー・ドイツを見て	三六一	今月の帝劇	三六

演劇と通俗性	三六	二月劇壇	四二
明治劇團總評	三八	『嘆きの天使』	四六
映畫『ナポレオン』	四〇	三月劇壇	四七
新劇雜感	四一	映畫に現はれたる人生批評	四二
劇評	四七	『實盛』と『野崎村』	四四
私の投票	四七	地獄變など	四五
「死」を描いた文學	四八	フアウスト	四六
築地座評	四二	三月劇壇	四七
今月の芝居	四三	四月の劇評	四七
劇場風景	四九	『大地』と『新しき土』	四三
「新劇」見物記	四六	演劇雜感	四四
西洋で造られる日本的映畫	四二	現代の芝居	四六
左團次・菊五郎・その他	四三	人形芝居	四八

獨斷語	四八二	新日本文化の變遷	五〇九
『忠臣藏』讚美	四八六	綺堂氏の脚本	五〇
新春劇評	四八八	映畫樋口一葉	五三
映畫『阿部一族』	四九三	映畫の型	五五
四月の劇壇	四九四	老年と青年	五六
劇場にて	四九五	文展の繪	五七
興味ある新劇	五〇〇	新劇の消滅	五八
素人の觀た展覽會	五〇一	劇場の革新	五九
漫才大會	五〇三	人氣役者	五二
シヤリヤーピン	五〇四	映畫に就いて	五三
天狗と高時	五〇五	演劇について	五三
批評の無力	五〇六	勸進帳と助六	五七
獨創文化	五〇七	忠臣藏耽溺	五三

映畫見物	五三	俳優の個性	五三
舊劇と新劇	五四	團十郎襲名	五六
觀劇妄語	五四	默阿彌六十年祭	五七
演劇と映畫	五四	歌舞伎と女形	五八
映畫“ハムレット”	五四	映畫演劇隨想	五八
ハダカの繪	五四	歌舞伎はどうなるか	五八
『三人姉妹』など	五四	チャップリン所感	五九
映畫と文樂	五四	わが演劇感想	五九
藝術の魅力	五五	歌舞伎の悩み	五九
『ヘツダ』を観て	五四	歌舞伎の『源氏物語』	五九
歌舞伎座復興	五七	ハムレット芝居	五九
藝術の人氣	五六	芝居ばなし	六〇
五つの戯曲	五七	人氣役者の正體	六〇

日本の演劇の將來

六七

『居酒屋』

六九

木に據つて魚を求める

六〇

うかれ女

六三

歩行と觀劇

六六

解題

紅野敏郎

六九